

大臣認定構造計算プログラムの利用上の不具合等について

プログラム名：SEIN La CREA認定版/RC

大臣認定番号：SPRG-0001-04

大臣認定年月日：平成20年9月5日

報告 番号	不具合の内容	影響の範囲 (当該不具合により影響が生ずるおそ れのあるケース)	影響の度合い
1	Y方向に傾斜している柱がある場合、柱の部材剛性を部材座標系から全体座標系に変換する際の変換マトリクスに誤りがあった。Y方向への傾斜成分がマトリクスの余分な項に乘じられていた。	Y方向に傾斜している柱がある場合	Y方向に傾斜している柱がある場合の応力が誤っている。 モデルによって異なるため、危険側になるかどうかは判断できない。
2	モデル化条件でパネルを考慮するとした時、パネルを除いた解析用要素の長さを求める際に、パネルの長さの取得に不具合があった。 ・直接形状を入力した際に、その入力した値が考慮できていなかった。 ・柱のパネル高さを除いた長さを計算する際に、パネルのサイズの1/2で計算するところを1/4にしていた。	パネル考慮とした場合	応力解析結果が変わる。(応力値、固有周期他) モデルによって異なるため、危険側になるかどうかは判断できない。
3	RC造で鉛直荷重時モーメントの材端部設計用応力位置を「剛域端またはパネル端位置」とした場合に、剛域端を取得する方向がX方向とY方向で逆となっていた。	RC造で鉛直荷重時モーメントの材端部設計用応力位置を「剛域端またはパネル端位置」を選択した場合	応力取得位置が異なるため、柱の断面算定で使用する設計応力が異なり、検定結果が異なる。影響については個々のモデルによって異なるが、デフォルトは[節点位置]のため、影響がでるモデルは少ないと思われる。
4	危険断面位置算出時、梁に開口のある非構造壁が取り付けられている場合、開口寸法V、Hの取り方が逆になっていたため梁の危険断面位置および内法寸法が誤っていた。	RC造計算ルート3で梁に開口のある非構造壁が取り付けられている場合かつ開口が正方形で無い場合	保有耐力時の応力が正しくない。 モデルによって異なるため、危険側になるかどうかは判断できない。
5	RC造で地震時追加節点荷重が入力されており、耐力壁が層のせん断力の50%を超えるせん断力を負担する層がある場合、剛節架構の応力割増しに誤りがあった。	RC造で地震時追加節点荷重が入力されており、耐力壁が層のせん断力の50%を超えるせん断力を負担する層がある場合	各階の水平力分担が異なることによって、耐力壁の水平力負担率が50%を超える場合の剛節架構への割増率が異なるため、設計応力が変わる可能性がある。耐力壁が層のせん断力を100%負担する場合には影響ないが、負担率が50%を超える場合は危険側となる。

プログラム名：SEIN La CREA認定版/S

大臣認定番号：SPRG-0002-04

大臣認定年月日：平成20年9月5日

報告 番号	不具合の内容	影響の範囲 (当該不具合により影響が生ずるおそれのあるケース)	影響の度合い
1	S造、露出柱脚の断面計算で、フロー③の終局曲げ耐力 M_u を算出する際に、Y方向加力時の断面計算でY方向のベースプレート幅を採用するところ、X方向のベースプレート幅を採用していた。	S造、露出柱脚のY方向加力時の断面計算で、フローの③(リファレンスマニュアル計算編P.8-41参照)を通る場合、かつ、ベースプレートが正方形でない場合。	S造、露出柱脚の断面計算で、フロー③の M_u の値が間違っている。ベースプレート幅がY方向よりもX方向が長い場合、危険側となる。
2	ブレースのせん断力分担率 β による柱の付加軸力 ΔcNi を上階から下階へ伝達する際に、RC基礎梁等が配置された1階柱で軸力増加分を伝達しない不具合があった。	S造ルート2の地震時断面計算でRC基礎梁が配置された場合	一階部分のS造柱断面計算で使用する設計用軸力が小さく、危険側となる。
3	Y方向に傾斜している柱がある場合、柱の部材剛性を部材座標系から全体座標系に変換する際の変換マトリクスに誤りがあった。Y方向への傾斜成分がマトリクスの余分な項に乘じられていた。(【鉄筋コンクリート造】1と同じ。)	Y方向に傾斜している柱がある場合	Y方向に傾斜している柱がある場合の応力が誤っている。 モデルによって異なるため、危険側になるかどうかは判断できない。
4	モデル化条件でパネルを考慮するとした時、パネルを除いた解析用要素の長さを求める際に、パネルの長さの取得に不具合があった。 ・直接形状を入力した際に、その入力した値が考慮できていなかった。 ・柱のパネル高さを除いた長さを計算する際に、パネルのサイズの1/2で計算するところを1/4にしていた。 (【鉄筋コンクリート造】2と同じ。)	パネル考慮とした場合	応力解析結果が変わる。(応力値、固有周期他) モデルによって異なるため、危険側になるかどうかは判断できない。
5	露出柱脚を配置した鉄骨柱が部材中間部での水平部材の取り付け等により分割され複数要素となる場合、中間節点部分にも柱脚と同等の回転剛性が考慮されていた。 (修正内容) 柱脚配置位置のみ回転剛性を考慮するよう修正	露出柱脚を配置した鉄骨柱が途中で分割され複数要素となる場合	柱の中間節点に柱脚部の回転剛性を持つため、応力計算結果に相違が出る。危険側になる場合はほとんどないと思われる。